

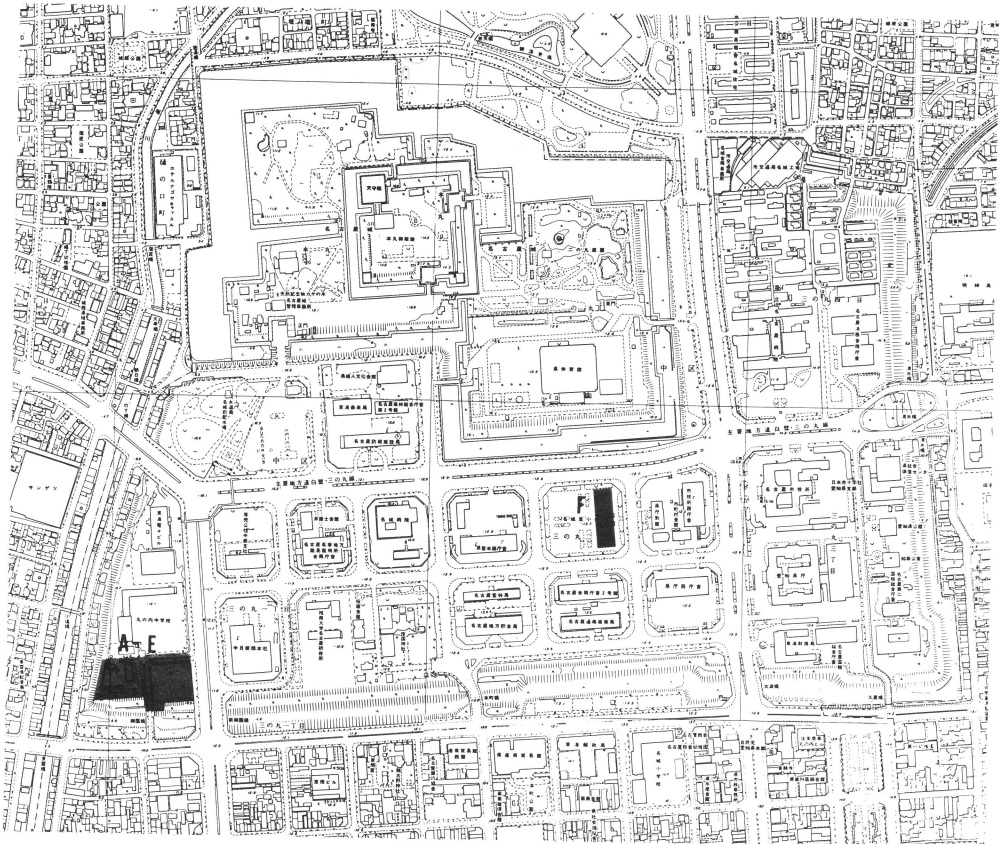
なごや じょう さん まる 名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

立地と沿革

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の西北端に位置し、標高13m程を測る。城の外堀に囲まれたこの中区三の丸一帯は、現在では、官庁と公共施設の街となっているが、明治維新以前においては、成瀬氏、竹腰氏ら、尾藩藩の重臣達の上屋敷（役宅）が立ち並ぶ武家屋敷地を形成していた。

この一帯は、慶長年間の名古屋築城以前においても、藤原氏一族の荘園としての「那古野庄」の名が文献にみえ、戦国時代では、織田信長の生誕地ともいわれる「那古野城」の故地とされている。また、考古学的にも、天守閣再建工事の際に、その基礎部分から、弥生時代中期を中心とする貝層が発見されるなど、三の丸遺跡は、単に近世のみならず、これらの時代を通じた遺跡と考えることができる。



第1図 調査区の位置 (1/12000)

調査の概要

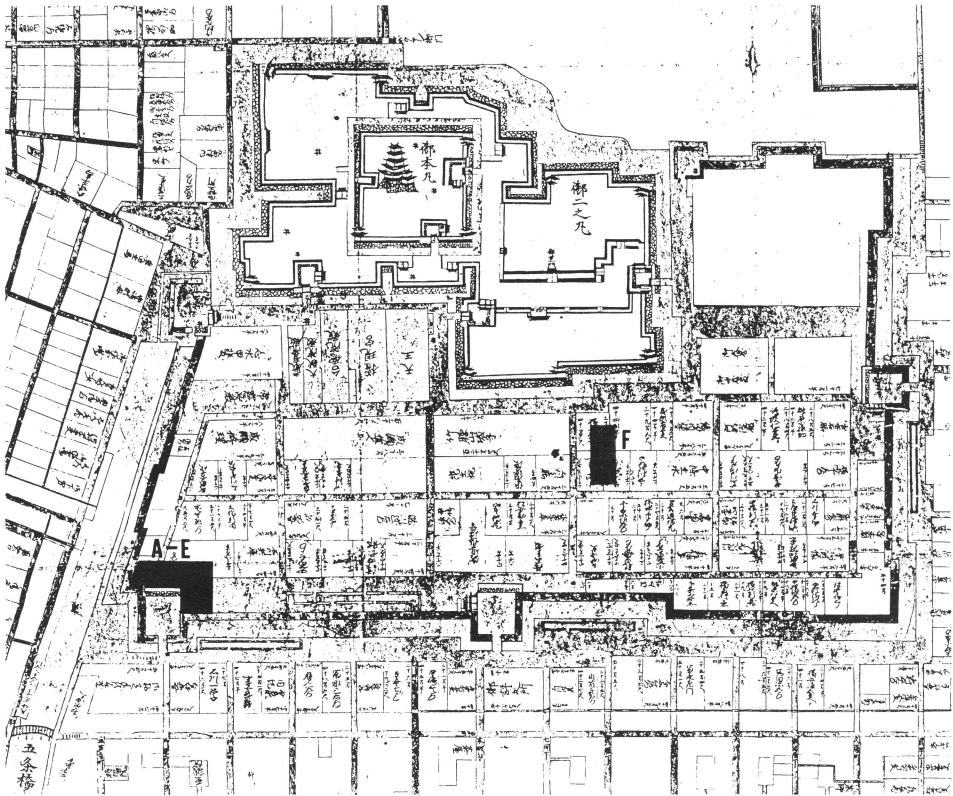
昭和63年度の調査は、市立丸の内中学に南接する愛知県新文化会館（図書館）建設用地7600㎡、（A～E区）及び、名城東小公園内の、名古屋第一地方合同庁舎建設用地3100㎡（F区）の2地点について実施した。このうち、新文化会館用地については、既に県教育委員会が昨年度1400㎡程を調査しているが、今回は、この部分も含め概要を報告する。

調査の結果、予期された通り、弥生～近世の遺構、遺物が確認されたが、それらは、概ね、Ⅰ期（弥生～古墳時代）、Ⅱ期（奈良～平安時代）、Ⅲ期（室町～安土・桃山時代）、Ⅳ期（江戸時代）の四期に区分することが可能であった。

調査地点のうち、A～E区では、Ⅰ期の竪穴住居十数軒の他、墳丘墓も確認され、それに続くⅡ期では、数十軒の竪穴住居と大型の掘立柱建物1棟が検出された。

また、F区では、Ⅰ～Ⅱ期については、若干の遺物がみられたのみであったが、Ⅲ期においては、幅6.5m、深さ3mにも及ぶ大溝を確認することができた。

Ⅳ期については、両地点とも、武家屋敷に伴なう井戸、地下室、土坑等の遺構と多くの遺物が出土し、「名古屋城三の丸」を解明する上で、貴重な資料となった。（梅本博志）



第2図 尾府名古屋図（蓬左文庫蔵一部分）

A～E区の調査の概要

I期（弥生～古墳時代）

今年度の三の丸地区遺跡では、下層において弥生時代から古墳時代にかけての遺構を検出した。これらは継続的に営まれた生活の痕跡では無く、断絶期間を挟んで大きく二時期に別れた。堆積土は黒褐色を基調とするが、これをそれぞれの文化面で検出することは出来なかった。

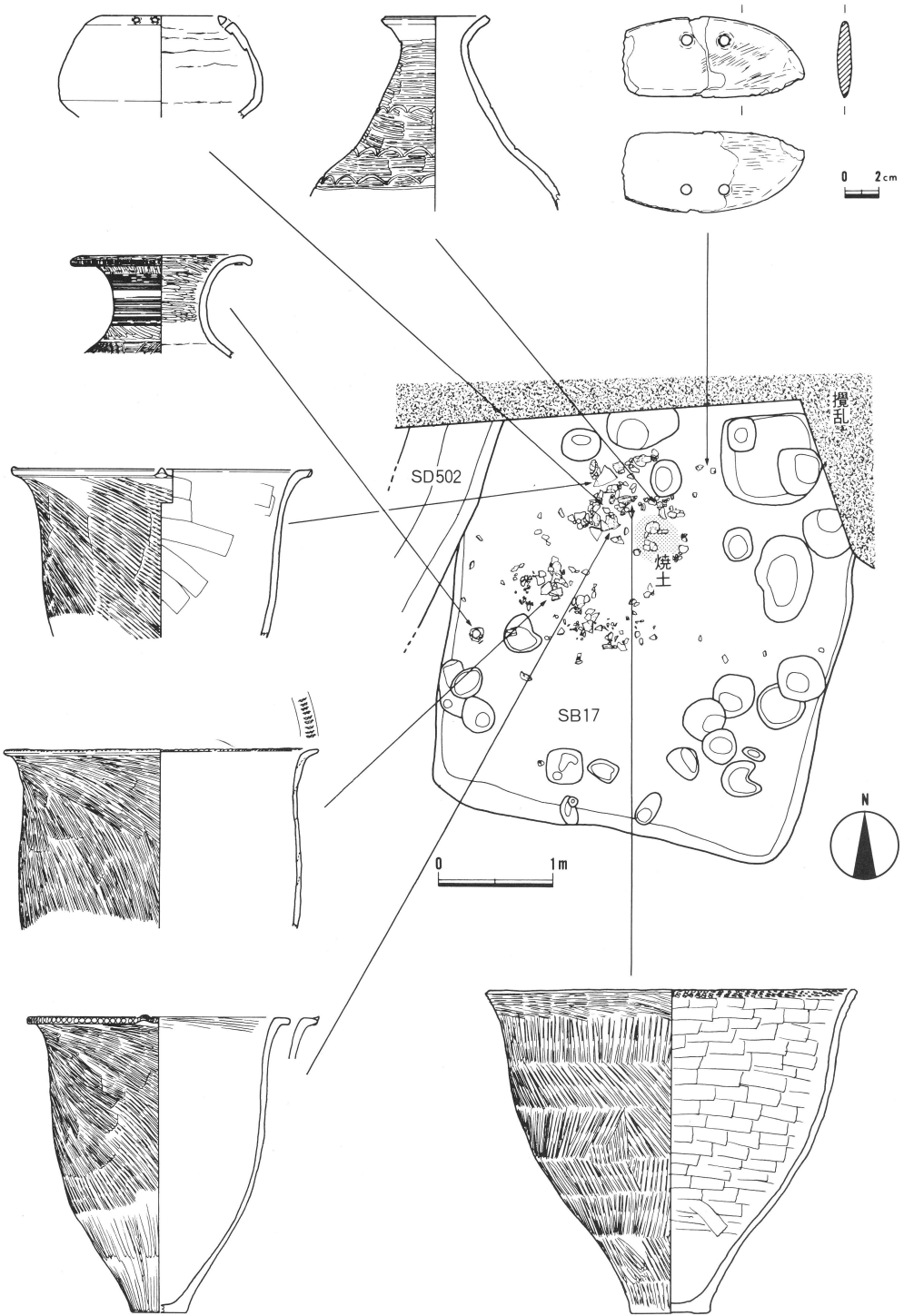
弥生時代の遺構は、主要遺構配置図の如く、竪穴住居5軒他、溝、土坑等を検出した。これらに伴い、また一部包含層中から弥生時代中期の壺、甕、石包丁等が出土した。SB17は、弥生時代の遺構の中で最も良好な状態で遺物が出土した住居である。中央やや北寄りに炉跡と思われる浅い窪みが認められ、その脇の床面直上の位置から無頸壺、太頸壺、長頸壺、条痕紋調整の甕、石包丁等が一括して出土した。時期としては、弥生時代中期中葉（貝田町古期）にあたるものと思われる。

古墳時代の遺構は、主要遺構配置図の如く、墓の可能性が考えられる。溝による方形区画3基、竪穴住居8軒の他、溝、土坑等を検出した。これらに伴い、また包含層中から、弥生時代後期末から古墳時代前半にかけての壺、甕、台付甕、高杯及びミニチュア製品等が出土した。

今回調査を行なった名古屋城三の丸地区は、名古屋台地（熱田台地）の北西端に位置するが、その出土遺物には周辺の各地域に於けるいくつかの特徴が窺える。これらの資料は、当該期の人的、物的交流を考える上で、貴重な資料となるであろう。（松田 訓）



第3図 主要遺構の配置（I期）



第4図 A区SB17出土状態及び実測図（土器はすべて1/6縮尺）

II 期（奈良～平安時代）

三の丸遺跡における奈良・平安時代の遺構面は、調査区北部においては近世以降のかく乱をかなり受けていたが、御園門前の広場及び道路の下となった調査区南西部は黒褐色の包含層が厚く堆積し、残存状況は比較的良かった。

遺構 この時期の主な遺構としては掘立柱建物1棟、竪穴住居数十軒があげられる。

掘立柱建物は調査区南端にあり、一辺約70cmの隅丸方形の柱穴が柱間約180cmで東西3間、南北5間に並ぶ。時期は柱穴内出土遺物から奈良時代のものと考えられる。

竪穴住居は一辺3m～6mの正方形で方位は北西にふっているものが大半である。カマドが確認できたものは少ないが、A区S B 115では北壁中央にカマドをもうけ、土師器甕を逆に伏せ底部を台として使用した例もある。時期としては8世紀後半～9世紀前半ころのものももっとも多い。

遺物 遺物は包含層の残りが比較的良かったせい、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器などが多数出土した。また住居址内や土坑内より、いくつかの一括資料を得ることができた。

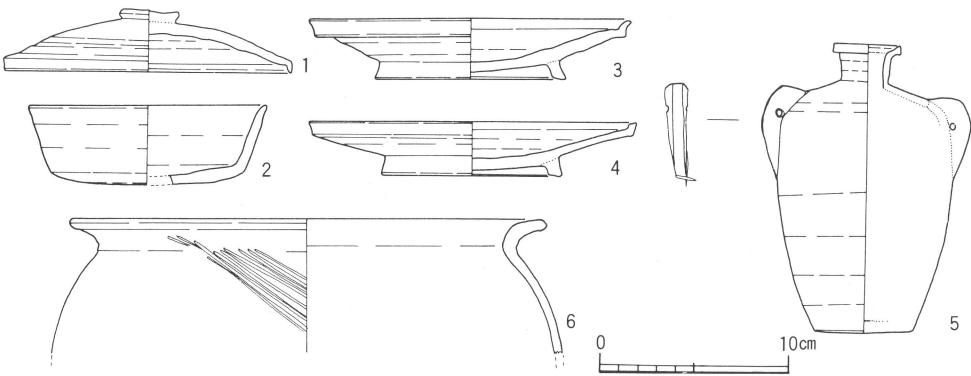
遺物のなかでは須恵器がもっとも多く、杯蓋・杯身・椀・盤など供膳形態を中心に、壺・瓶・甕が若干出土している。土師器は甕が多数出土しているが、その他の器種は甕片がわずかに見られるのみである。包含層中からは7世紀に塑る遺物もみられるが、遺構に伴って出てくるのは8世紀になってからである。8世紀前半の遺物はあまり多くないが、8世紀後葉から9世紀前葉にかけてもっともたくさん出土している。この時期のまとまった一括資料としてA区S B 11、D区S B 02・S K 166などがあげられる。S B 11からは、ほとんど完形の灰釉陶器双耳瓶（第6図-5）が発見された。双耳瓶は口径3.5cm、器高15cmで、耳は面とりきれ、上にあがり気味である。体部はやや茶褐色を呈し、肩から前面にかけて濃緑の灰釉がかかる。今回のように双耳瓶が住居内から完形で発見されることはほとんどなく、たいへん珍しい例である。時期的には0-10号窯期に含まれるものと思われる。平安時代になると灰釉陶器・緑釉陶器が見られるようになる。S B 104内の土坑からはK-90号窯期の灰釉椀・皿・長頸瓶などがまとめて出土しており、消費地における灰釉陶器を考えるのに良好な例となろう。緑釉陶器は調査区東部の包含層中より、多く出土している。器種としては椀・皿・壺類があるが、なかには陰刻花文を施した段皿もある。

三の丸遺跡は猿投窯という窯業の一大中心地を控えた尾張における集落址の数少ない調査例として、今まで不明確であった消費遺跡での土器の様相を明らかにするうえで、貴重な資料となろう。

（城ヶ谷和広）



第5図 主要遺構の配置 (II期)



第6図 A区 SB11出土土器



D区 堀立柱建物



A区 SB11土器出土状態

IV期（江戸時代）

遺構 IV期の遺構は、調査区の西寄りの地区と北東の地区へ集中して見られ、土塁沿いの南東の地区では、希薄である。『金城温故録』や城内絵図によれば、調査区はほぼ江戸時代を通じて、中条・大道寺両家の屋敷地と広場に相当しており、遺構の集中密度程度も屋敷地と広場の位置とほぼ合致する。また、屋敷地内のSK147（A区）より、「大道寺」と墨書された蓋（第8図-12）が出土しており、考古資料からも大道寺家の所在が確定できるものと思われる。

集中する遺構の中で特に著しいのは土坑であり、この大半が廃棄土坑である。中には、規模等から地下室を転用したと考えられるものがある。

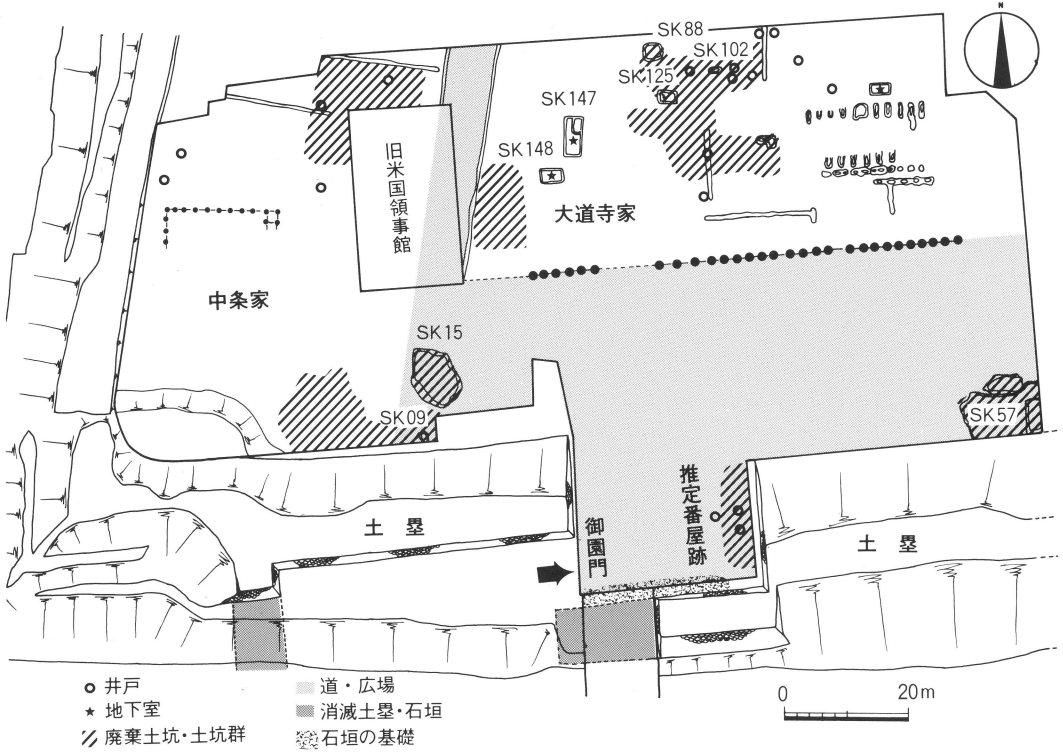
調査区西・南側の土塁、石垣は、明治以降かなり改削・改築されているが、今回の調査で改削・改築前の土塁、石垣を知りえた。調査区南西隅では、土塁の延長が確認され、土塁のコーナーは城内側に張り出していることが判明した。調査区南中央の石垣下に、基礎と考えられる板築状の埋土をもつ土坑を確認した。その土坑は、南の石垣で現存の石垣よりさらに西へ延びており、当時の石垣が現存のものより西へ延びていたことが判った。したがって、御園門の位置は調査区内で確認できなかったが、城内絵図にある様に東西方向へ開口していたことが判明した。

遺物 遺物は、江戸時代を通じて見られ、全体的に陶器の占める割合が高い。遺物数はコンテナにして約1000箱に及ぶ。そのほとんどが廃棄土坑からの出土である。

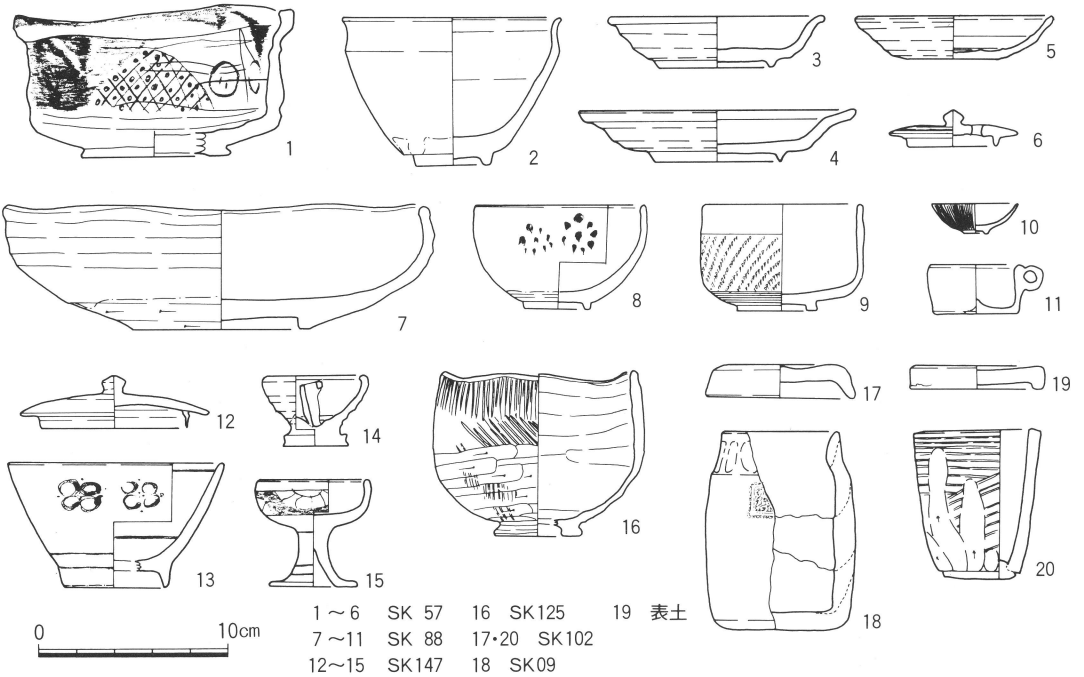
1～6は、SK57（E区）出土。1は織部の椀。2は鉄釉の椀、天目茶椀。3は長石釉の皿。4は総織部の皿。5は無釉の皿。6は長石釉の香炉の蓋。これらは17世紀前半のものである。7～11はSK88（D区）出土。7は灰釉の平鉢で、底部に「延享五年 四料理間附 辰七月十九日納」と墨書される。8は、灰釉の椀、梅文湯呑。9はサビ釉と鉄釉の掛け分けの椀、鎧湯呑。10は磁器の小椀、紅皿。11は灰釉の小鉢、餌鉢。これらは18世紀後半から19世紀にかけてのものである。12～15はSK147（A区）出土。12は鉄釉の蓋で内面に「大道寺 手□□附 己七月十九日」と墨書される。13は染付けの椀、広東椀。14は乗燭。15は磁器で、仏飯具。これらは19世紀中頃のものである。16はSK125出土で、手捏ねの椀、赤染茶椀。17～20は焼き塩壺。18には「ミナト藤左エ門」の刻印がある。17と18、19と20のセット関係が予想される。

全体的な傾向を見ると、一般的な日用陶磁器類と共に、1、6、16の嗜好品も見られ、高級武士の生活様相が伺える。

（佐藤公保）



第7図 主要遺構の配置 (IV期)



第8図 III期の遺物

F区の調査の概要

Ⅲ期（室町～安土桃山時代）

遺構 名古屋城築城時の整地層下から、調査区北側を中心に、溝、井戸、掘立柱建物等が確認された。各遺構は、切り合い関係から大きく前・後期の2時期にわかれる。

前期の遺構として、ほぼ南北方向から東西方向へ走り、そして再び南北方向へ鍵手状に屈曲する溝（SD53、64）とその溝に南北方向のみ平走する溝（SD61）等がある。共に幅3m深さ1.5m～2mを測る。

後期の遺構は、井戸と溝（SD51、52）等がある。中でもSD51は幅5～6.5m、深さ3mを測る大溝である。この大溝は、幅5mの薬研状であったものを、巾6.5mの箱状に改削しており、箱状の溝底に薬研状の溝の痕跡を確認した。

『金城温故録』によると、名古屋城築城以前、大永年間（1521～27年）頃、名古屋城二の丸を中心とした地区に那古野城が築かれており、後期の遺構は調査区の位置、遺構の規模、後述する遺構内出土の遺物の時期から「那古野城」に伴う遺構の可能性が高い。中でもSD51は、その規模から堀に相当するものである。

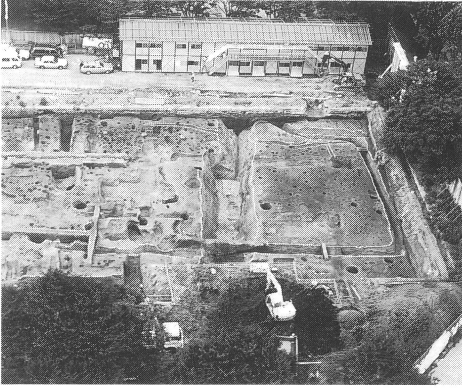
前期の遺構である鍵手状に屈曲する溝（SD53、64）は、その形状により屋敷地を画する溝と考えられる。従って、周辺に那古野城築城前の居館址の存在が想定される。

遺物 出土遺物は、瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の甕、中国陶磁、土師器等が見られ、全陶磁器の中でも瀬戸美濃産の施釉陶器の占める割合は非常に高い。

1～4は、前期の遺構であるSD61より出土した。1は鉄釉の椀で、体部下位から底部は無釉である。天目茶椀。2は無釉の皿で、内面に螺施状の沈線が施される。3は口縁に鉄釉がほどこされた緑釉皿。内面全体にタール状のものが付着する。4は折縁の鉢である。灰釉が施される。これらは15世紀後半の遺物と考えられる。

5～12は、後期の遺構であるSD51より出土した。5、6は鉄釉の椀で、体部下位から底部にかけてサビ釉が施される。天目茶椀。7は灰釉皿。内底面と高台内は無釉である。丸皿。8は鉄釉皿で、底部は無釉であり、碁笥底である。9は灰釉皿。内底面のみ無釉である。内禿皿。釉は白濁している。10は無釉皿で内面に同心円状に沈線が施される。11は播鉢。全面にサビ釉を施す。12は土師器鍋。内面上部に縦方向の吊り手がつく。内耳鍋。これらの遺物は16世紀初めから中頃の遺物と考えられる。

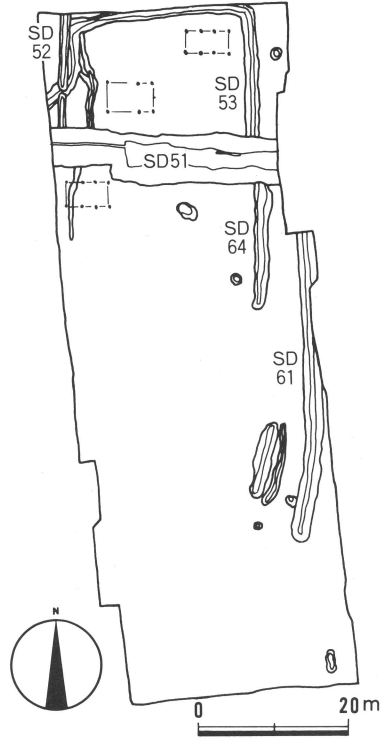
（佐藤公保）



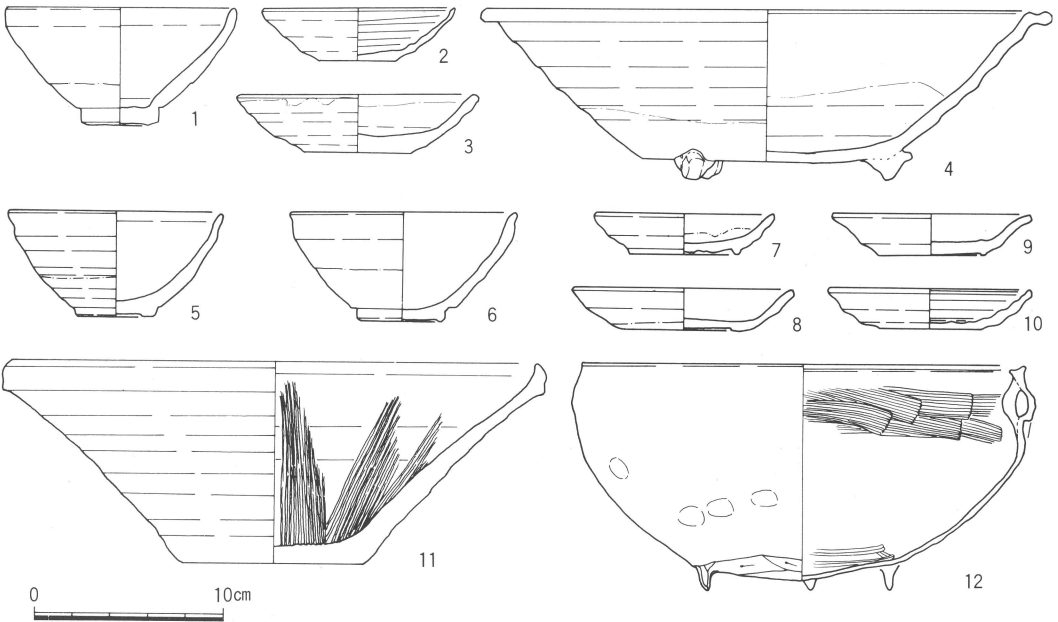
調査区北部の中世遺構群



大溝 SD51



第9図 主要遺構の配置 (III期)

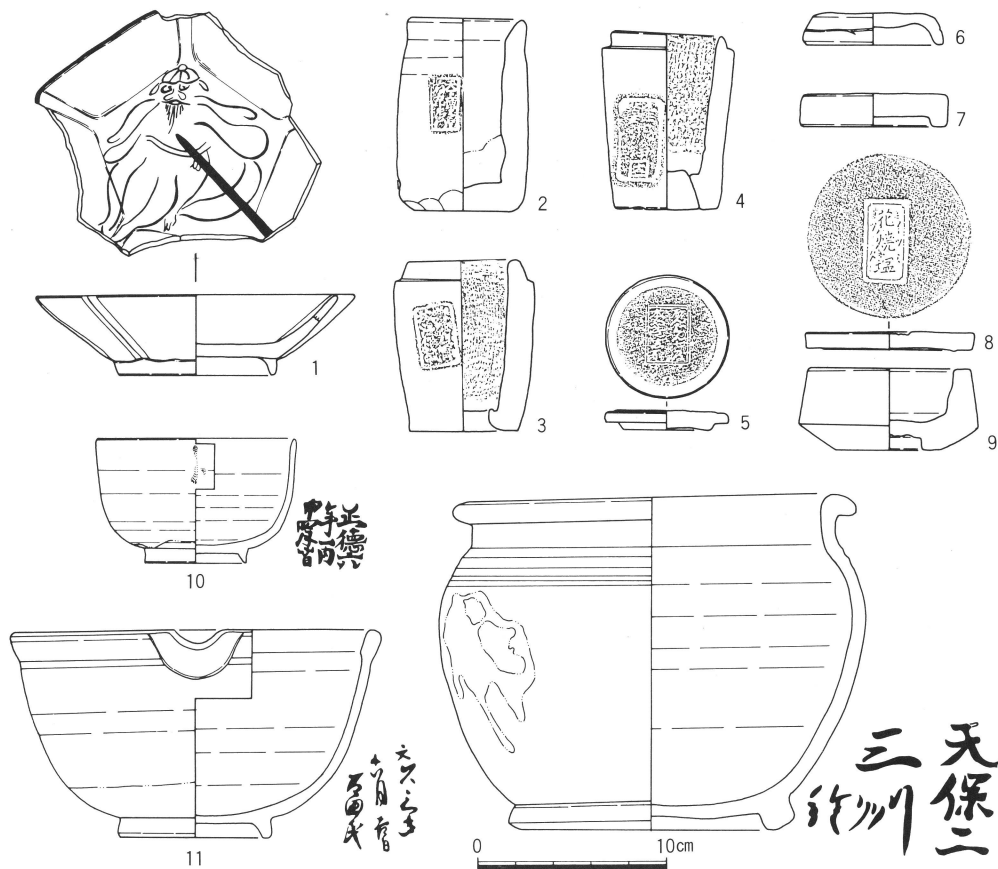


第10図 III期の遺物 I~4 SD61 5~12 SD51

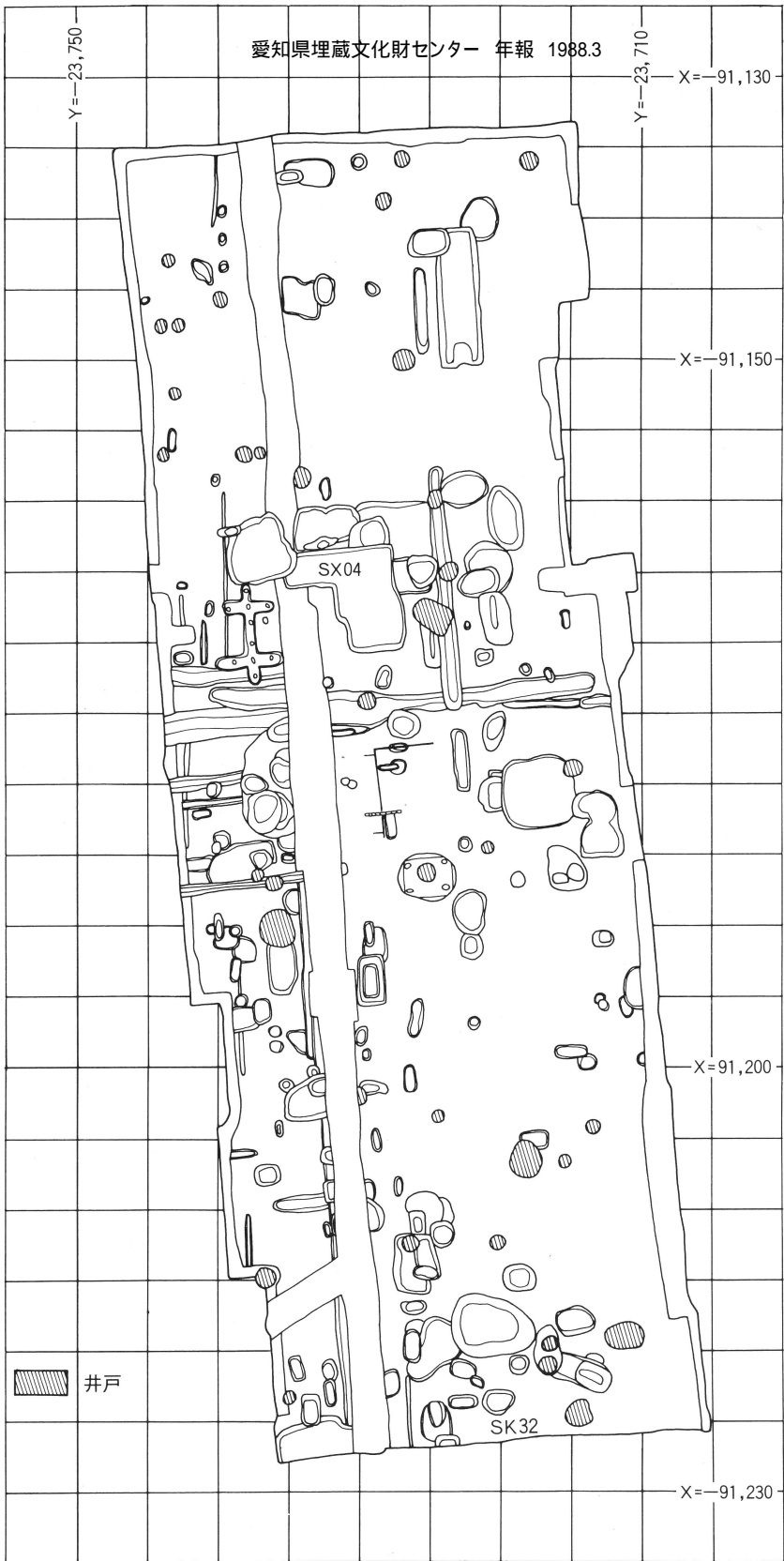
IV期（江戸時代）

遺構 検出した遺構は、建物礎石、柱穴、井戸、溝、地下室、廃棄土坑である。『尾府名古屋図』によれば、調査区は横井氏、下条氏、小山氏、生駒氏の屋敷にかかっており、遺構は各屋敷地に伴うものである。発掘区の西側と南側では廃棄土坑が集中しており、何度もくりかえし掘られた土坑内からは膨大な量の陶磁器類が出土した。

遺物 出土した遺物の大部分は陶磁器類で、キセル、釘の金属製品、硯、印鑑の石製品や織部瓦、人形、建物や道具類を模した小型製品等が出土している。陶磁器類の多くは瀬戸・美濃産であるが、陶器碗では、信楽など畿内産の製品といわれる肥前産の製品もみられる。第11図の1はS K32出土の志野織部向付、2～4・9は焼塩壺で2は「天下一堺ミナト□藤左衛門」、3は「御壺塩師□堺湊伊織」、4は「難波浄因」の刻印がある。5～8は焼塩壺の蓋で、8には「イツミ□花焼塩□シタ」の刻印がある。8と9はセット関係が予想される。10は正徳六年（1716）銘のある灰釉碗、11はS X04出土の文久三年（1863）銘のある灰釉片口鉢、12は天保二年（1831）銘のある鉄釉甕である。 （小澤一弘）



第11図 IV期の遺物



第12図 F区遺構配置図 (1/500)

まとめ

1. A～E区で確認されたI期前半（弥生時代中期）の住居群は、高蔵遺跡、古沢町遺跡等の資料から、ある程度概要が知られていた名古屋台地南半に対し、出土例が少なく、不明な点が多かった台地北部の様相を知る上での良好な資料となるものと考えられる。
2. I期後半（古墳時代前半）の墳丘墓群は、SZ02周溝の出土土器等から、5C前半を中心とする時期に形成されたと考えられるが、その形状は、東区片山神社遺跡検出例等と同様、基本的には「方形周溝墓」と相違するものではなく、在地における墓制のあり方の一端を示すものと考えられる。また、付近の包含層中からは、須恵質の円筒埴輪片も出土しており、付近には、これに続く時期の古墳が存在する可能性もある。
3. II期の集落の性格は、明らかでないが、大形の柱穴を有する掘立柱建物の存在、あるいは、灰釉双耳瓶、陰刻花文を有する緑釉陶器などの出土品から、寺あるいは、地方の官衛といった様な何らかの公的施設の存在を推定し得るかもしれない。
4. F区では、「那古野城」の堀に比定される大溝が確認されたが、これに重複する形でそれ以前の、「居館」を区画すると思われる溝を検出することができた。文献によれば、この

発掘区 年代		A～E（新文化会館）			F（合同庁舎）	区 分
		集 落	墳 墓	城 郭	城 郭	
B.C.	弥生	■ (A-SB17) (E-SB07)	■ (D-SZ01) (D-SZ02)			I
A.D.						
200						
400	古墳					
600						
800	奈良	■ (A-SB11) (D-SK166)				II
1000	平安					
1200		■ (A-SB104) (A-SK807)				
1400	鎌倉					III
1600	室町				■ (SD61) (SD51)	
1800	江戸			■ (B-SK57) (D-SK147)	■ (SK04) (SX04)	IV
	明治					V

第1表 三の丸遺跡の遺構の変遷

周辺を含むとされる「那古野庄」は、15C後半までは存続していたようであり、それとの関係も注目されるところである。

5. IV期の遺構については、A～E区で2軒分、F区では4軒分の屋敷地を検出し得たが、これは、古絵図等の記載とほぼ一致するものである。屋敷地内の建物は、礎石の大半が失われている為、明らかにはし難いが、井戸、地下室、廃棄土坑の分布等から、ある程度の配置は、復元し得ると考えられる。

6. 名古屋城の三の丸一帯は、既に、官庁街としての整備が進んでいるため、遺跡そのものがほとんど残存していないのではないかと考えられてきた。しかし、今回の調査では既設の建物の基礎等の攪乱部分を除き、名古屋台地上では、まれにみる良好な状態で、弥生～近世に至るまでの遺構が残されていることが明らかとなった。遺跡としての「三の丸」は、風致地区としての、ゆとりある空間構成が幸いし、台地上に残された数少ない保存状態のよい遺跡といえることができる。

(梅本博志)



A・C・D区完掘状態